極楽寺だより

長門市三隅下
野波瀬
0837(43)0625

秋の永代経法要のご案内

次のとおりおつとめいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますようご案内いたします。

日時　十一月十二日（月）
　　昼　一時半　夜　七時半
　　十一月十三日（火）
　　昼　一時半

講師　俵山　正福寺住職
　　上原　泰教師

◇昼間仕事の方は、ぜひ夜にお参り下さい。
◇昼、夜と続けて参って下さる方が多くなってきました。有り難うございます。

永代経法要とは（えいたいきょうほうよう）

「いつまでも（永代）お念仏のみ教え（お経）が伝えられますように」と願い（仏徳讃嘆）、またご門徒のご先祖が、志を納めてお寺を護りお念仏を喜ばれたことを感謝して（祖恩報謝）お勤めする法要です。

ですから、「その心を大切に受け継ぐ」ということは、「さそいあって法を聞き、如来さまのご恩をよろこぶ」ということであります。

今後の行事予定

12月18日(火)14時	仏婦報恩講
12月31日(月)11時45分	除夜の鐘撞き
1月　1日(火)10時	元旦会
1月14日～16日	御正忌報恩講

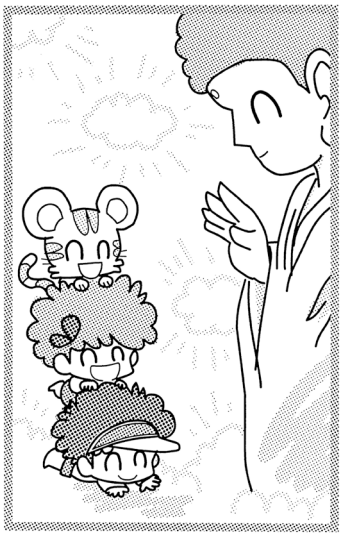
オシエノカケラ
極楽寺だよりエッセイ

毎日、お参りしましょう！
キャンペーン　第四弾

我に返る

近頃は、核家族が増えました。家族と言うのは、本当に大切な関係ではありますが、近すぎて、甘えが出て、かえってややこしいことになることがよくあります。他人だと距離がある分、遠慮も配慮もありますから冷静な対応もできますが、これが親子になると近すぎて、逆に感情が剥き出しになってしまいます。「友達に言われたら素直に聞くことができるけれど、親に言われたら、逆に受け容れることができない」とか。「よその子だったらそこまで言わないけれども、自分の子どもだから余計に腹が立つ」とか。そういうことって、ありますよね。

昔は、一つの家に、たくさん人間がいましたから、その場でいろいろと役割が分担されていました。たとえば、お母さんに怒られたから、その晩はおばあちゃんの布団に潜り込んで寝るとか。家族だけではなくて、昔は近所のおじちゃんやおばちゃんとの距離が今より近くて、怒られたり、可愛がられたりということがありました。いろんな人間関係があるところでは、いろいろな形で役割が分担されていて、逃げ場もきちんと用意されていたわけです。ところが近頃はそういう場所がなくて、どうしても行き詰ってしまいます。何かクッションになるようなものが必要なのですが、核家族ですから他には誰もいません。では、そんな時にどうしたらいいのでしょう。



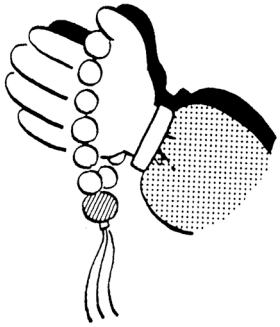
藤場俊基という先生は、「そんな時に、お仏壇があるではないか、阿弥陀様がおられるではないか」と言われています。お仏壇の前に座ると、間ができる。ちょっと冷静になれる。

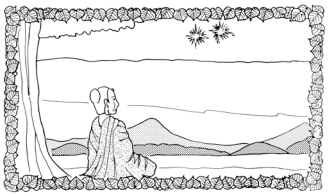
自分をふり返ることができる。人に言われたら腹が立つことも、阿弥陀様の前では「そうかもしれないなぁ」と素直になれる。そんな場所があるということは、人間が生きる上で本当に大切なことだと思うのです。

かくなる私も短気なものですから、カチーンとくると言わなくても良いことを言ってしまい、後悔の念にかられることがよくあります。いつも近くにお仏壇があればと思うのですが、なかなかそうもいきません。ですから最近は、心の中でお念仏を称えるようにしています。お念仏に心を鎮めさせるご利益なんてありませんが、「なまんだ～ぶ、なまんだ～ぶ」と称えると、間がとれて我に返ることができる。逆にお念仏を忘れると、やはり我を忘れてしまい失敗するのです。（坊守いわく。「忘れすぎなんじゃない？」トホホ。その通り。でも、お念仏やお仏壇がなかったらと思うと・・・、そっちの方がおそろしいですよね。）

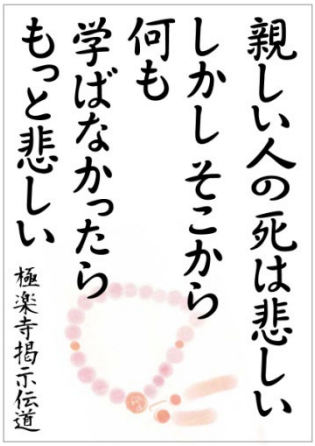
我に返ることができる場所。自分をふり返ることができる場所。誰もがその場を敬い、姿勢を正す場所。そんな場が家庭にあるということは、人間が生きる上で本当に大切ではないでしょうか。ところが現代社会に生きる私たちは、そういう大切な働きをもっている場を失いつつあります。そのような場を最も必要としている時代でありながら。それどころか、「そんなものなんていらないよ」と平気で思っているのではないでしょうか。

現代社会は、自己主張の時代だと言われます。そのため自分の意見を主張する技術ばかりが求められ、自分をふり返ることや見つめ直すこと、相手の立場を思いやることができない人も増えたのではないでしょうか。我を主張することで我を忘れてしまう時代に、我に返る場所としてのお仏壇の働きを再確認していきたいと思います。■





極楽寺掲示伝道
けいじでんどう



9月の言葉

「人間は死ぬんだ」ということは、誰でも知っています。しかし、親しい人を亡くした時、簡単に割り切ることなどできません。いかに頭だけの理解でしかなかったかを、思い知らされます。私たちは、頭で、知識で理解したことで安心し、日々の出遇いの大切さ、尊さ、愛おしさを見失っているのではないでしょうか。

以前、宮城 顎という先生から、

「失った悲しみの大きさは、
与えられていたものの大きさである。」

という言葉を教えていただきました。本当にその通りだなあというのが正直な思いです。しかしその驚きを、裏返してみれば「失わないと気づけないのか」という自らの愚かさへの気づきでもあります。

ならば、このご縁を通して気づかされた「たくさんのものを与えられている」身であることを、日々の出遇いの尊さを、しっかりと味わいながら生きているかというと、どうなのでしょう。しばらくするとすっかり忘れてしまい、また親しい人を亡くしては、それが頭だけの理解だったと気づかされ「失わないと気づけないのか」と知らされるばかり。同じことを繰り返すだけに終わっているようです。

仏教では迷いの姿を、尺取り虫が同じところをグルグルと回る姿に譬えます。私たちも同じ場所をグルグルと、迷いを深めながら生きているのかもしれません。

大切な人を亡くすのは　本当に悲しいことです。しかし、そのことから何も学ぶことなく生きることは、もっと悲しいことではないでしょうか。悲しみの中から、教えられる大切なこと。それを、亡き人が仏様に成られて私たちに伝えて下さった教えだといただいていく。そこに、亡き人と共に生きていく人生が開かれていくのだと教えられるのです。■

10月の言葉

政治討論番組が嫌いになりました。最初は面白いと見ていたのですが、しばらくすると単なるなじり合いにしか聞こえなくなり、心が殺伐としてくるのです。政治家や官僚の人たちだけではありません。マスコミの方や様々な分野のコメンテーターの方々。皆さん優秀な方ですし、偉い人ばかりです。でも、どうしてこんなに賢い人や偉い人が多いのに、心豊かな方向に、建設的な方向に進まないのでしょう。

最近の報道を見ると、ミスがあれば責任をなすりつけあって、責任を押しつけられたものが周りからの集中砲火を浴びる。まさに「いじめの構図」が繰り広げられています。それは私たちの生活の中にまで及び、気がつけば、誰も責任を取りたがらない世の中になりました。間違いを認めると、責任追及がうるさい。だからみんな嘘をつき、屁理屈でごまかしても、自分の非を認めない。責任論を語るほど、無責任な世の中が広がっていく。心も殺伐とするはずです。

「俺は責任取らないよ。失敗したらお前の責任だぞ」って突き放すと、言われた方は怯えて手元が狂ってしまう。逆に、「失敗しても構わないから好きにやりなさい。後のことは引き受けた」と言ってあげれば、リラックスできるから仕事の精度が上がる。／

責任というのは、お互いに押し付けあうんじゃなくて、取り合うものなんです。そういう集団においては、誰かが責任をとらなければならない問題そのものが起きないんです。

思想家の内田樹先生は、こう指摘されます。間違いを認めず、責任を押し付け、いつも正しい場所に身を置くことで、私たちは殺伐とした嫌な世の中で、いついじめの矛先が向けられるのかとビクビクする生き方を選びとってしまったのではないでしょうか。

唐代の詩人白楽天が、道林和尚という禅僧に「仏法とは、どのような教えなのか」と問うたところ、「諸悪莫作・※

※ 衆善奉行（悪いことをするな、善いことをせよ）と答えました。白楽天が「そんなことは、三歳の子どもでも知っている」と返すと、道林和尚は「三歳の子どもでも知っているが、八十の老人になっても、実行することは難しい」と応じた話が伝えられています。

正しさを求めることは大切です。しかし、人間は正しさだけでは生きられません。そんなごく当たり前なことを忘れてはいないでしょうか。

私は弱い存在だと知るからこそ、助け合い、支え合いの大切さを知るのでしょう。私は間違う存在だと気づくからこそ、相手にも寛容になれるのです。私は無智であるという自覚があるからこそ、違う意見を尊重していけるのです。そこにこそ、「お互いさま」や「ありがとう」「恵みをいただく」「生かされている」といった、心豊かな言葉も生まれてくるのでしょう。

弱さや愚かさを、逃げ道にしてはいけません。しかし、弱さや愚かさと向き合うことは、卑屈になることではありません。向き合うことから広がる豊かな世界があるのです。親鸞聖人は人間の弱さや愚かさを通して、この私を包み支えて下さる世界と出遇われたのです。

私たちは、「間違わない」人が賢い人、偉い人だと思っているのかもしれません。そのことが、殺伐とした生きづらい世の中を作り出してしまったのではないでしょうか。

こんな時代だからこそ聖人の生きざまを通して、自らの歩みを見つめ直すことが、求められているように思えてなりません。■

極楽寺ホームページ

随時更新しています

極楽寺.com で検索して下さい。

式章をかけましょう

お取越しの季節です。お取越しに限らず法事や法座、お葬式など、仏事の際には「門徒式章」をかけましょう。式章とは、肩衣という礼服からできたものです。和服における男子正装は裃ですが、実は肩衣と袴をセットで裃というのです。遠山の金さんが桜吹雪の入れ墨を見せるために脱ぎ捨てるのが肩衣です。この肩衣をもとに、1932(昭和７)年浄土真宗本願寺派では、「門徒式章」をかけることで、正装とみなすことが制定されました。

極楽寺では、住職継職法要の記念品として、式章をお配りしております。大事にしまわれるよりも、ぜひ日常的に使っていただきたいと思います。もちろん、お祝いの場で掛けられるのも結構です。喜びも悲しみも阿弥陀様と共に生きるのが、真宗門徒の姿なのですから。

式章をかけて、法座へ参拝されるご門徒のみなさん

質問コーナー

ご門徒の方からの質問を、ご紹介するコーナーです。
皆さんも住職に、気軽に質問して下さいね。

Q お焼香のときに、キンは鳴らすのですか？

お焼香の作法については「作法の極意」のコーナーで、いずれご紹介するつもりですが、今回はキンについてのみ、ご説明させていただきます。テレビドラマなどでは、よくお焼香の際にキンを鳴らすシーンが出てきますが、浄土真宗の作法では鳴らすことはありません。

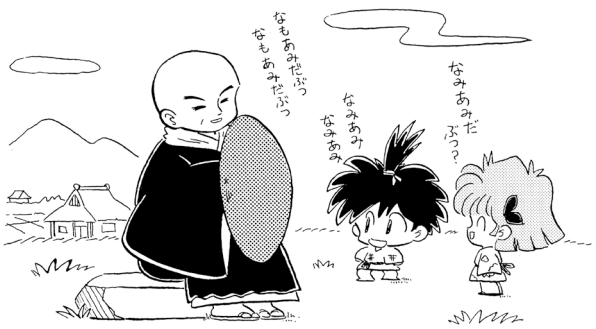
正式名は「鏧」といって、大きなものから小さなものまでありますが、お勤めのときに鳴らすものです。(『勤行聖典』で、●がキンを打つタイミングの印です。)

ただ、子どもさんがお仏壇に手を合わせるとき、よくキンをたたいている場面に出くわします。それは、子どもさんがされることとして、大らかに見守ってあげましょう。でも、どうして子どもって、キンをたたきたがるのでしょうね。誰か答えてくれませんか。

お取越しの季節です

「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越して（早めて)、各家々で勤めるという門徒にとって大切な伝統行事です。ところが近頃は、「どうして先祖でもない人の法事を、勤めなくてはならないのか！」と怒られそうな時代になりました。しかし、親鸞聖人が亡くなられてから今年で七百五十年。長い歴史を通して、「伝えなくてはならない願いがある」「受け止めなくてはならない尊いご恩がある」と私たちのご先祖や先輩方が、その心を「お取越し」という行事に込められて、私たちのところにまで届けて下さっているのです。

実りの秋を迎えましたが、畑も耕すことで豊かな作物が育つように、心も深く耕さなくては、豊かな心は育ちません。しかし、私たちの生きる現代社会は、目先の楽しみや面白さばかりを追い求める、薄っぺらな世の中になってはいないでしょうか。



長い歴史を通して、私に届けられている願いを深く受け止めること。それが足下を掘り下げ、心を耕すことにつながるのではないでしょうか。そこにこそ、心豊かな人生が開かれていくのだと教えられるのです。

極楽寺だよりを送りませんか

極楽寺では、都会に出られているご門徒、ご家族、有縁の方々に、極楽寺だよりをお送りしています。現在、送り先は100件以上となり、お寺としても大変うれしく思っております。できれば、もっと増えるとうれしいのですが。

都会の子どもさんやお孫さんに、送られてはどうでしょう。連絡先を教えていただければ、お寺から直接お送りします。ご遠慮なくお申し出下さい。